

国際文化交渉論の現在

— シュウォルツの巖復論から国際文化論への軌跡 —

平野 健一郎

A Theory of International Cultural Relations:
Its Development from Benjamin Schwartz's Study of Yan Fu

HIRANO Kenichiro

The development of a theory of international cultural relations can be traced back to Benjamin Schwartz's study of Yan Fu (*In Search of Wealth and Power: Yen Fu and the West*, Harvard University Press, 1964). Yan Fu translated some of the 19th century Western European works into Chinese as a way for China's modernization. To analyze Yan Fu's cultural struggles, Schwartz applied a path-breaking methodological framework, defining a culture to be "a vast, ever-changing areas of human experience" and proposing to deal with the encounter between two cultures as a vantage point for taking a new look at both cultures. After reading the Schwartz's work carefully and translating it into Japanese, this author formulated a theory of international cultural relations that considers cultural contacts and changes themselves to be important aspects of international relations.

キーワード：シュウォルツの巖復論、シュウォルツの方法論、文化の捉え方、
文化触変論、国際文化論

はじめに

【ある書評】

外国語で書かれた書物、とくに専門の研究書が、日本語に翻訳されるには、大きく分けて二つの傾向があるのではなからうか。

第一は、その書物に記載されている事柄がよく知られておらず、われわれ日本人にとって新発見の事実にみち溢れているばあい。第二は、その記載事実はある程度周知のものとなっているが、しかし、その内容の解釈がきわめてユニークであり、われわれ日本人に発想の転換をしいるようなものであるばあいである。

最近、わたしは、そうした想いをわたしにつよく抱かせた二冊の本を、読んだ。一つは、R・スチュワート著『医師ベチューンの一生』……であり、他の一つは、B・シュウォルツ著『中国の近代化と知識人—嚴復と西洋』（平野健一郎訳、東京大学出版会、七八年四月刊）である。

これは、今から30年前に、河田悌一教授が拙訳について書いてくださった書評（河田悌一「近刊紹介—B・I・シュウォルツ著・平野健一郎訳『中国の近代化と知識人—嚴復と西洋—』」『アジアクォーターリー』第10巻第4号、1978年12月、128-130ページ）の冒頭部分である。河田教授は当時、和歌山大学の助教授であり、平野は東京大学教養学部の国際関係論の助教授であった。

河田教授は、その年の4月に出た翻訳を、12月には紹介してくださり、近代中国思想の専門研究者から好意的な書評、今読み返しても非常に含蓄に富んだ書評をしてくださった。そして、次のように、必読書として推薦してくださった。

その歴史的事実のもつ意味の分析において、著者の力量は、いまだわれわれ日本人のもたなかった光彩を放っているといえよう。それゆえ、本書は、二十世紀への移行期における中国の文化的、歴史的状况にたいする一人の知識人の意識的反應をたどる研究ではあるが、ひろく中国と西洋という異質の文明の出会い、それによる中国の対応、変化を知るため、同様の歴史的经验をへた日本人としてぜひとも一読せねばならぬものとしてある。（前掲書評、128-129ページ）

そして、拙訳を「きわめて読みやすい好訳」と褒めていただいた。「ハーバードに学ばれた最適任の訳者によって、十四年後に日本語に訳されたことは喜ばしいことである」と。しかし、原書が間違っていた中国人の人名の誤りをそのまま踏襲していることを指摘され、訳者が中国思想史の研究者としては力不足であることをもさりげなく指摘された。なお、指摘していただいた誤りは二刷で訂正した。

原書の Benjamin Schwartz, *In Search of Wealth and Power: Yen Fu and the West* は1964年に Harvard University Press から刊行された。私はその前年にアメリカへ留学し、ハーバード大学大学院にいた。「地域研究—東アジア」と歴史学の院生として、この本の勉強からスタートし、14年後にその日本語訳を出版し、その後国際関係論の分野で模索を続け、2000年に『国際文化論』という教科書を刊行した。シュウォルツ教授の嚴復研究に強い影響を受け、その著書の翻訳に格闘しながら、中国思想史の研究には進まずに、国際関係論の分野に留まった。そして、私なりの考えでシュウォルツ先生から得た刺激も活かして、国際関係論のサブフィールドとしての「国際文化論」を私なりに作り上げてきた。その経緯を若干述べておきたい。

【翻訳の経緯】

翻訳に14年かかったわけではない。もっと早く日本語訳を刊行すべきだったことは私自身痛感してきた。翻訳を始めたのは、1967年に米国留学から戻って、2年後に日本の大学に就職してから数年経ったことであつたから、1973年ごろからであつたと思う。ベトナム戦争のさなかであつたので、日本で資料を集めてアメリカに戻り、博士論文を完成させてから就職、という計画を変更して、そのまま日本で

就職したため、ハーバードへ出すべき博士論文が完全に途中放棄という状態になった。しかし、日本で仕事をしながらもやはり書かなければいけないと考え、大学で国際関係論の授業をしながら、ほぼそと満州研究の博士論文（英文）の執筆を心がけていた。それと同時に、当時の日本の国際関係論が学問としての方向を模索している中で、私も国際関係論が、一言で言えば、アメリカの受け売りでよいのだろうかと考え、何とか独自のものがつくれないかと模索した。自分の満州研究と教育面の国際関係論の模索と並行して、Benjamin Schwartz, *In Search of Wealth and Power*の翻訳に取り組んだのである。

翻訳は大変な作業であった。19世紀ヨーロッパの政治経済の重要な業績を、巖復が19世紀終わりから20世紀初めの中国に翻訳によって紹介する、それをシュウォルツが英語に直してこまかく分析する、それをさらに私が日本語に翻訳するという作業であるから、翻訳の翻訳の翻訳の翻訳というような作業を毎日少しずつ続けることになった。しかし、その作業はけっして私の研究上、教育上の模索を邪魔するものではなかった。むしろその逆で、方向づけを与えてくれ、内容も豊かにしてくれたといわなければならない。満州研究の枠組みもシュウォルツ先生の巖復研究からほとんどそのまま得たのである。

【国際文化論の模索】

最初、私は国際関係論の院生として、修士論文では関東軍による満州国国家構想を検討した。しかし、博士課程でもそれを続けて、政治史的・軍事史的に満州事変や満州国を研究するという本道は閉ざされた。中村貞子という方（後の緒方貞子教授）がUCバークレーに出された博士論文を“Defiance in Manchuria”という書として刊行され（Sadako Ogata, *Defiance in Manchuria: the Making of Japanese Foreign Policy, 1931-1932*, Berkeley, University of California Press, 1964）、間もなく、『満州事変と政策の形成過程』という日本語版（原書房、1966年）も出版されたのである。その研究によって、満州事変・満州事変後の関東軍の政策決定過程はくまなく明らかにされ、私が使い続けるつもりになっていた虎の子の資料も全部使われてしまっていた。しかし、満州事変がどうして起こされたのかということは、私なりにどうしても解きたいと思ってハーバードへ勉強に行ったので、アプローチを変えなくては行けないと思った。

日露戦争から満州事変までの25年間に、日本・日本人が現地の中国東北で何をやろうとしたのか、どういう日中関係をつくり出していたのか。その中に、1931年9月18日に関東軍が満州事変という武力行動を起こさなければならなかった原因が見つかるのではないかと考えた。ハーバードへ行ってからもあれこれ考え、文化人類学の授業なども聴講しているうちに、シュウォルツ先生の方法の意味が分かって、自分の満州研究の枠組みにすることとなった。さらに、それをそのまま延長して、国際関係論を私なりに再構成する試みとして、文化の側面から国際関係を考えるという方法を立て、国際文化関係論を構想するようになっていった次第である。

一 シュウォルツの巖復研究

【ハーバードにおけるシュウォルツ】

私がハーバードに在籍した当時のシュウォルツ先生は、学部生向けの政治学のコースで現代中国政治

を教えていた。シュウォルツ先生の出世作は、*Chinese Communism and the Rise of Mao* (Harvard University Press, 1951) という名著である。講義は、中国共産党史と中国共産党政治の問題を学部生・大学院生に教えるものであった。その一方、大学院生には、歴史学のコースで古代中国思想を講義していた。老子とか荘子の文章を熱心に、本当に自分が好きだから話をするという感じで講読され、熱がこもって声が裏返るといような講義であった。当時研究成果を出版されたばかりの嚴復に関する講義はなかったが、ここに象徴的に表れているように、巨大にして複雑な文明に魅せられ、それを何とか理解しようと、現代中国、近代中国、古代中国という三つの時代から分け入ろうとしていた研究者であった。

シュウォルツの嚴復研究がなされた当時は、いわゆるロスト一流の近代化論全盛の時代であった。その中で、中国の近代化への関心から、近代西洋思想の翻訳紹介に焦点を合わせた研究がなされたに違いないが、けっして近代西洋の思想がそのまま中国にどう影響を与えたかという研究にはとどまっていなかった。それから、当時のハーバードには、フェアバンク、ライシャワーが睥睨する「ハーバードのアジア研究世界」があり、その中でもっともブリリアントな研究者として尊敬されていたシュウォルツが、ライシャワーの日本近代化論の視座をたくみに超える研究を出したということでもある。フェアバンクは一般に「ウエスタン・インパクト論」の本丸とみなされていた。そのフェアバンクが「高弟」として可愛がり、尊敬してもいたシュウォルツが、近代西洋と中国の間の文化関係に関して、より高度な分析を生み出したのである。

原書のタイトルは、“In Search of Wealth and Power”（「富強の探求」、すなわち近代化）が主題で、副題が“Yen Fu and the West”（「嚴復と西洋」）である。加えて、ハードカバー版の表紙カバーには、“Western Thought in Chinese Perspective”（「中国の視野から見た西洋思想」）というサブ・サブタイトルが印刷されている。ただし、この第2サブタイトルはその1ヶ所だけで、正規の書誌にも、その後刊行されたペーパーバックにも印刷されていない。それがなぜかは判らないが、河田教授が指摘されたように、シュウォルツの嚴復研究の一つの意義は、この“Western Thought in Chinese Perspective”というタイトルに表されているといえよう。この点はまた、「周縁から見た中国」というICIS第3回研究集会のテーマとも絡むといえよう。これについては後述する。

【嚴復研究の中心テーマ】

さて、シュウォルツの嚴復研究の狙いは、中国の近代化の追求がどのように行われたかを明らかにしようとするもので、それを嚴復に焦点を絞って行うものであった。その中心テーマは次の一文に集約されている。

嚴復は彼の基本命題を繰返し繰返し宣言している。それは、すなわち、西洋の力の源泉—東洋と西洋の違いの根源—が単に武器や技術にあるのではなく、また、単に経済組織や政治組織にあるのではなく、さらにまた、なんらかの制度的工夫にあるのですらもないのであって、現実に対するまったく異なるヴィジョンこそがまさにその根源なのであり、それは思想と価値の領域にこそ見出される、というものであった。（拙訳、42ページ）

つまり、洋務派の目指した「中体西用」、西洋の新しい文明を、その武器や技術に限って取り入れようというのでは不十分であり、また、組織や制度を変えるというのでは不十分である。もっと根源的な、現実の見方、森羅万象の見方、ヴィジョンの違いが東洋と西洋の違いの根元にあるので、そこまで到達しなければならないということを、厳復が繰り返し述べたのだということであり、それを厳復の翻訳を点検することによって明らかにするというものである。

厳復は若き洋務派として、26歳前後に2年間イギリスに留学し、そこで東洋と西洋の違いを探った。その出発点は、儒教の教義を守るために手段を変えようかという洋務派的な立場であった。「保教」、教えを保つにはどうすべきかから出発したが、シュウォルツによって上記のように要約された考え方に到達する過程で、保教のためには国を保たなければならない、「保国」が必要であるという考え方に至った。その結果、伝統中国にとって根元的な儒教の教えそのものを捨てなければならないという、極めて厳しい決断をすることになったのである。それは、厳復にとっても、中国全体にとっても、言葉本来の意味でラジカルな変容であるが、同時に、悲劇的な変化である。

【分析の基本枠組】

次に、方法上の中心を考えたい。シュウォルツが厳復研究に採用している方法はどのようなものであろうか。その分析枠組の基本を探すとすれば、それは第1章「背景と枠組み」の冒頭の文章に記されている。すなわち、

西洋と「非西洋」（ノン・ウエスト）との出会いについて語るばあい、西洋を既知数と仮定するのが普通である。「西洋の衝撃」（ウエスタン・インパクト）という比喩的な言い回しが思い起こさせるのは、明瞭に認知される物体が、もう一つの動きの少ない物質に衝突していくイメージであろう。（拙訳、3ページ）

である。つまり、未知数と未知数がぶつかるというように見る、ということである。

この後に続く次のページの第2パラグラフが、この基本的枠組みをさらに敷衍して述べたものに当たる。4つに分けられる。まず「われわれが扱うのは既知の変数と未知の変数なのではなく、極度に問題性を帯び、絶えず変化する人間経験の二つの巨大な領域なのである」と見るのである。これが、西洋と非西洋という二つのものを捉えるときに基本的な枠組み、姿勢でなければならない。大雑把な「西洋と非西洋」という分類を言い換えて、「二つの文化」、「二つの文明」と一般化すれば、文化間の関係をどのように捉えるかという点について、基本的な見方がここには示されている。

確かに、当時の東洋と西洋の変化の間には多少のタイムラグがあり、いわゆる「西」が少し先ではあった。しかし、世界的な視野では、変化は世界的に同時進行だったといってもよいのではないだろうか。たとえば、社会進化論の日本における受容を見ると、本場のイギリスでスペンサーがその説を述べているころ、日本では、それを受け入れながら、日本的な展開を示すという現象が20年そこそこの時間差で起こっている。それは、当時としては大きなタイムラグだったかもしれないが、全体として見ると、同時進行といってもよいような誤差のうちに収まってしまっているものではなかっただろうか。19世紀半ばと

いう時代は、世界の全体が社会進化論に染まる時代であったのである。それぞれに巨大な領域である二つの文化はそれぞれに絶えず変化する、その間の関係なのだということであり、その変化は実際の世界でかなり同時進行的だったのではないかと考える。

2点目は、「かえって、このような出会いの場そのものを、今までとは別の見方で二つの世界を見るのに有利な展望台に、作り変えることができるのではないか」ということである。出会いの場を未知数と未知数が出会う場と見ることによって、出会いのダイナミックスを見ることができ、それによって、それまで固定的に捉えていたものを、新しい視点で見直すことができるというわけである。この考え方は、私がおのち、国際関係論の中で展開した文化接触論、国際文化関係論の基本的な立場になっている。二つの文化の接触、衝突、変容の場に焦点を合わせると、両方の文化の特徴がよりよく見えてくるのではないかと考える。この、二つの文化の接触に焦点を合わせるという方法については、少し後に、さらに別の文脈で触れたい。

3点目は、同じパラグラフの中で少し順番を変えるが、次の文章によって示されている。「西洋と、ある非西洋の社会、文化との出会いを扱うには、両世界の特性のなかに同時に、しかも可能なかぎり深く、没入することが必要なのであり、それ以外の方法はないということである」。この3行ほどの文章は、読んだだけで気が遠くなるようなことを述べている。まして中国近代思想の世界に深く、深く入っていくことができるかどうか。私はここで怖気づき、撤退したともいえるが、シュウォルツはそれを敢行し、さらには古代中国思想にチャレンジしたのである。

4点目は文化拘束性の問題とその克服に関するものである。すなわち、「もちろん、自己の文化の外に立つことはだれにもできないのであって、われわれはみな『文化に拘束されている』のである。にもかかわらず、文化の基底に、あるいは文化の彼方に、普遍的な人間性の領域が存在していると考え、それによって、一定程度の自己超越が可能になると望んでもよいであろう」というのである。このような境地への到達を望むためには、もちろん、上記の第3点を試み、努力を続けなければならない。文化拘束性を自覚して、自分の文化を深く理解することができなければならない。また、研究対象とする文化、自分の外にある文化にも深く没入しなければならない。

多様極まりない文化の背後に、それらすべてに共通する普遍的な人間性が存在するかもしれない。それがあると信じることができれば、自己超越は確かに可能である。私は、歴史学を学び、先ほど述べた必要から文化人類学にも視野を少し広げたが、ここに述べられている文化拘束性とそれを超える必要ということは、歴史学にも当てはまるであろうと考える。そもそもわれわれが歴史学をやるのはなぜか。われわれすべてが現実世界であくせくと生きる中、何とか自分たちの位置を見定める役割を仰せつがっているのが歴史の研究者である。とすれば、芋洗いの桶の縁に何とか手をかけ、伸び上がって外を見る、歴史の流れを見るのが歴史研究者の使命であろう。その点からも、この第4のセンテンスには共鳴するところがある。(以上、4点の引用文はすべて、拙訳、4ページ、第2パラグラフから)

【文化の出会いを研究—中心・周縁問題に触れて—】

文化の「出会い」の場、文化接触の過程を文化理解に絶好のポイントとする方法は、「周縁から見た中国」という全体テーマにも関連するところがある。文化接触論は、中心と周縁という問題、ここでは、

中国と西洋のどちらが中心で、どちらが周縁かという問題に、別の解答を用意する。“Western Thought in Chinese Perspective”という「一瞬の」第2サブタイトルは、確かに、この研究に中国と西洋のどちらを中心と見るか、どちらを関心の対象にするかという問題があることを指し示す。河田教授は、拙訳の書評の中で、シュウォルツには西洋の概念を中国に当てはめて見る見方があるのではないかと指摘された。確かに、毛沢東研究のころには、そういう傾向がかなり見られた。河田教授は、厳復研究ではそこからかなり進歩していると評価した上で、やはりシュウォルツの関心には西洋がある、そういう意味での西洋中心主義があるのではないかと問題を提起された。書評から二つの文章を引用すると、

厳復が、西洋の原著者の思想内容をいかに歪曲、誤解して理解したか、みずからの有する中国の伝統思想をもとにいかにユニークに解釈したか、を指摘する。と同時に、原著者の意図を越えて、かれらが考慮に入れていなかったより新しい見解を、厳復がいかに読みとっていたかということをも、明らかにするのである。

中国の伝統文化のもとに生きた厳復が西洋の思想家の文章からいかなる可能性を読みとったか、西洋思想から中国にとってのいかなる有効性を引き出しえたか、という視角から、厳復の翻訳という思想活動をみるのである。

（前掲書評、129-130ページ）

このように、拙訳からも消えてしまった“Western Thought in Chinese Perspective”というサブ・サブタイトルの内容を示すとともに、シュウォルツが中国と西洋の「どちらが中心で、どちらが周縁」と見ていることになるか、という問いにも答えている。シュウォルツになお西洋中心主義が多少残っていると看做しても、この書にはこのような意味があると指摘されている。

確かに、厳復は中国から近代西洋を見るという態度で一貫していた。それを分析の対象にしたシュウォルツは、やはり近代西洋から中国を見ているといわざるをえない。しかし、それは他の西洋の研究者にはなかなかできないことであり、それをやることによって、シュウォルツは近代西洋を逆照射するという効果を生み出している。近代西洋から中国、正確には、中国から近代西洋を見た厳復を見ることによって、近代西洋が、それまで西洋の知識人にも気づかれなかった姿を見せてくるというところが、この研究の素晴らしいところである。中国と西洋の「どちらが中心で、どちらが周縁か」という問題は、現実世界におけるものと、研究者の視点の方向のそれという2面を持つが、もはやそのどちらもがほとんど姿を消している。二つの文化が接触する場において、その出会いのダイナミックスを追究することによって、両者を捉える、という方法が示されている。文化の接触のダイナミックスを「文化交渉」と呼んでよいであろう。

【分析の前提—文化の捉え方】

文化の関係を考察するならば、文化をどう捉えるかが分析の前提となる。シュウォルツはどのような

文化の捉え方を提唱していたであろうか。まず、「文化はそれぞれに特殊であると同時に、それぞれに普遍的な人間性の領域を基底に有する、人間経験の巨大な領域である」と定義される。これを具体的にいえば、一つの文化の中には無数の要素が含まれており、それぞれの要素は互いに矛盾することさえあるということである。文化を、ありとあらゆるものを含む全体とみなすのである。シュウォルツは、たとえば中国文化は「けっして、文化人類学の単純な学派が想定するような統合された全体ではない。むしろ、それは相争い、正反対でさえある多くの傾向からなる複合体である」といつている（拙訳、6ページ）。

言葉を換えていえば、それぞれの文化が無尽蔵な可能性を持っている、宝庫である、ということになる。とりわけ中国文化はその豊かさにおいて比類のない宝庫であるということになる。そのため、シュウォルツは現代からスタートして、どんどんさかのぼり、古代中国思想の解明に熱中するようになったのであろう。そして、そのように極めていけば、最後に行き着くのは「不可思議」、「不可知」の領域である、という。中国文化においては、老子の「不可思議」であり、スペンサーには「不可知」という概念があった。シュウォルツが嚴復とともに中国思想の根元を辿り辿って、可能な限り没入したところに老子がおり、万物の源流に「不可思議」を置いていた。この「不可思議」、「不可知」の領域があらゆる可能性を生み出していくのだと考える、とシュウォルツは述べているように思われる。

文化をそのように捉えた上で、現実に嚴復が置かれた具体的な歴史・文化の状況の中で、嚴復は一体何をやったのか、やろうとしたのかを考えていくことになる。そこで、当事者が置かれている時代の状況、時代の文脈と、社会への関心がもう一つの変数として非常に重要になってくるのである。

ここで、突然ではあるが、アンドリュー・ゴードンのマツザカ論が思い出される。ハーバード大学で近代日本史を担当するアンドリュー・ゴードン教授は、ボストン・レッドソックスに入団した年の松坂大輔を追いかけ、分析した近著『日本人が知らない松坂メジャー革命』（篠原一郎訳、朝日新書、2007年）の中で次のように述べている。

こういう日米の差異は流動的なものであって、時代とともに変わる。ひとくちに一国の文化といったところで、それはそれは幅が広いものだ。逆に言うと、違う文化の中にも深く共通している点をいくつも発見することができる。そして最も大切なことは、異文化同士が相互に影響を及ぼし合い、時代とともに劇的に変遷しているということである。これはスポーツ界でも、家族でも、会社でも起こっている。文化というものは、歴史や地球レベルの交流のなかで形作られていくものなのだ。（同書、102ページ）

野球文化論を越え、文化論として、このような考え方に私は同感する。ゴードンも完全にシュウォルツの文化論の影響下にあるのだと思われる。

拙著『国際文化論』は、シュウォルツの嚴復論の読解・訳読から始まった模索の中間報告を世に問うたものであるが、シュウォルツの文化の捉え方に大きく拠っている。その中で、その後の自分なりの勉強で多少明確にしたことがあるとすれば、文化は無数の文化要素、それも相矛盾する文化要素で出来上がっているというシュウォルツの捉え方（これはもちろんシュウォルツだけのものではないが）に、そ

の文化要素の一つ一つが実は多義的なものではないかという考え方を加えた点である。それぞれの文化要素が潜在的に持っている多義性に加え、一つの文化要素が他の文化要素との関連で営み出す機能も多様でありうる。時代の状況、社会の関心との関連で、そうした多義性と多様性のどれが前面に出てくるか、そのメカニズムが文化変容ではないかという考え方である。文化人類学でも文化要素の多義性が強調され、やがて論壇などでも「多義性」が流行語になる時代の中で、文化要素の多義性を盛り込んだことが、私の工夫であった。

【分析の前提—文化研究における個人】

河田教授は、書評の中で、シュウォルツは分析の対象に嚴復を選んだのであるが、ある時代の文化を個人に代表させることができるかどうか、これは慎重に考えなければいけないのではないかという問題提起をされた。すなわち、次のように述べられた。

ただ、本書は方法論として、西洋にたいする中国の反応と変化を嚴復という人物の思想的営みに問題をしばって論じられる。すなわち、「伝統的価値にたいして価値転換を試みようとした嚴復の努力」（傍点引用者）が追跡されるのである。したがってそのため、「嚴復の努力」に目が注がれるあまり、現代中国の歴史家、王弼の『嚴復伝』（上海人民出版社、1957年初版）に指摘されるような、辛亥革命後袁世凱の帝制運動に利用されることに象徴される、いわゆる「反動的嚴復」にたいして、著者の評価はいくぶん甘すぎるとの感をもつ読者もいるのではあるまいか。（前掲書評、130ページ）

確かに、どうして嚴復なのかということは当然問われるべきであろう。

これに対して、シュウォルツは、上に紹介した基本的な方法論を述べた後、「自分は嚴復を選ぶのだ」と、いわば居直っている。狭く絞った焦点、ある一人の人間の精神という狭い焦点を通して、この出会い、西洋と非西洋の出会いを見ることにしたのだ、と（拙訳、4ページ）。なぜなら、「私が彼の思想を意義あるものと認める、ということである。嚴復の関心は意義のある関心であり、それらの関心に取組もうとした彼の努力は意義のある努力であったと、私には思われる。嚴復の提起する諸問題は、中国と西洋の双方に対して、深甚かつ永続的な意味を持っている」（拙訳、5ページ）と考えるからであるという。

私はこの選択を有効であると思う。選択の対象は他にもあり得るから、正しい選択かどうかは別として、非常に有意義な選択であると思う。その理由の一つは、文化を複雑な複合体として捉えることを前提に、相反するものが競存する状況を嚴復が體現していたということである。嚴復には伝統が深く刻印されており、彼は伝統と近代が相克し始めた時代のはざまに生を受け、そういう人間であることを自覚して、西洋の近代思想を翻訳紹介する使命を自らに負ったのである。

「嚴復における伝統の刻印」は、「彼の個人的文化とも呼ぶことのできるものの上にぬぐいがたく印されていたと思われる」（拙訳、24ページ）という。注目すべきは「個人的文化」という表現である。先には、文化を巨大な領域として捉えるということであったが、その文化がたとえば嚴復という具体的な

個人の中に、個人の文化として存在しているというのである。文化は人間集団の所有物であり、特性であるが、一人一人の個人がいずれかの集団の文化によって文化化されることによって人間となるのであるから、究極に「個人的文化」を想定することは可能であろう。どの時代空間においても、何層かの集団の文化と個人的文化が多重的に存在すると考えるのが適当と思われる。

【近現代中国にとっての厳復の意味、シュウォルツの厳復論の意味】

近代・現代の中国にとって厳復はどのような意味を持つのであろうか。そして、シュウォルツの厳復論の意味はどこにあるのであろうか。

厳復は、自分の中で、近代との格闘と伝統との格闘を同時に行ったといえよう。確かに、近代の西洋に中国が学ぶべきものを見つけ、それらを採用すべきことを説いたが、その説き方は全面的欧化論から程遠いものであった。さりとして、それらがもともとは伝統中国の中にあったものだというような、托古や付会の言い方もしなかった。あくまでも厳復が自分の中で近代との格闘、伝統との格闘を同時進行させ、ぎりぎりの選択を主体的に行ったのである。それは厳復個人の努力であったと同時に、中国社会が行った選択でもあり、選択は多重的に行われた。「反動的厳復」という評価が行われたことを含めて、選択は苦難に満ちたものであり、多重的なものであった。そして、主体的なものであった。そのことを明確に指摘したのがシュウォルツの厳復研究の意義である。

私の観察では、厳復が行った主体的選択の格闘に、現在の中国の知識人の関心が集まるのではないかと思われる。「主体」ということばに重点がある。文化接触論の観点からも、主体的選択の格闘ということに意義がある。周知のように、厳復は中国共産党によって長く歴史から抹消されていたが、「4つの現代化」政策とともに名誉を回復され、北京歴史博物館に厳復を展示する一画も設けられるようになった。今日、北京大学図書館の玄関ホールには厳復の胸像が置かれていると聞く。厳復が中国史のもっとも困難な時代に、主体的選択の格闘を行ったことへの現在の中国の知識社会の評価が象徴されているといえよう。

二 国際文化論

【文化触変論】

以上のようなシュウォルツ厳復論の圧倒的な影響下に構想し、執筆した拙著『国際文化論』（東京大学出版会、2000年）の意味づけを自分なりにしてみたい。先述のように、ハーバード留学中に、歴史学部から文化人類学の授業を聴きに行き、自分の満州研究の新しい方法になるかもしれないと思ったのが、acculturationという文化人類学の中の小さなサブフィールドである。日本へ帰って、満州研究をまとめようとしながら、国際関係論のカリキュラムの中で文化接触論という講義を始めるようになった。翻訳作業を進めながらということも重なって、シュウォルツ厳復論を、おそらく世界中の誰よりも熟読玩味することになり、文化と文化の接触とそれによる文化の変容への興味を深めていった。1980年代の半ばごろには、「文化の接触による変容」をつづめた「文化触変」という造語を造り、そういう現象があることを抜きにして国際関係、なかんずくアジアの近代国際関係史を理解することはできない、と主

張るようになった。それはさらに昂じて、文化関係を中心にして国際関係を考えることができるのではないかと考え、国際文化関係論ないしは国際文化論を構想するに至っている。

国際関係論の教育・研究に従事すると、国際関係の文化的側面を誰かが考えなければならないという要請に直面する。その中には、常識的な文化交流論や外交文化論、あるいは空想的な国際文化論—文化交流が進めば、国際的な文化が出来るという議論—などがあるが、私は初めからそれらには飽き足りないものを感じていた。むしろ国際関係そのものが文化と文化の関係、文化的関係なのだ、なぜなら近代の国民国家そのものが文化的生成物だから、という見方を提唱しようと、「文化的関係としての国際関係」というエッセイを発表した。それをさらに押し進めて、文化と文化の関係として国際関係を見るところまで来たのが『国際文化論』である。

【文化を国際関係の単位とすることの問題】

その場合、文化とは何かということが当然問題になる。実は、古典的な国際政治学においても、文化は考慮すべき一つの要素である。一つ一つの国家がそれぞれに文化を持っているとされ、それが国家の国際行動に多少とも関係するとされる（外交文化論など）。しかし、文化と文化の関係として国際関係を見ようとするならば、文化を単位として、二つ以上の文化の関係を見るのであるから、そのような単純な捉え方ではとても取まらない。

まず、文化を国民社会の専有物とみなすことをやめ、すべての社会集団が固有の文化を持つ、いわば文化「体」として、他の文化「体」と関係を持つと考えることが必要となる。その時、シュウォルツの「個人的文化」の概念に啓示を受け、論理的にそこまで徹底すれば、すべての文化を国際関係の単位とすることが可能になることに気づいた。個人のレベルにも、国内の中間団体にも、地方にも独自の文化がある。複合体としての文化がある。それが国民社会のレベルにもあり、さらには、ヨーロッパや東アジアなど国際的な地域にも、微かにではあるけれども、地域としての文化があるのではないかと、いうように、文化を下から重層的に重ねて考える枠組みを考えるようになった。

このように、シュウォルツ厳復論を繰り返し読むことによって、文化の重層性という概念に至った。これを国際関係に即して言い換えれば、国際社会を、複数の次元上に存在する多様な社会から構成される重層的な構造を持つものと想定し、同一の次元上はもちろん、異なる次元上に存在する集団間—主権は持たないかもしれないが、特有の文化を持つ集団間—に発生する文化触変を、重要な国際関係と見る、という考え方である。同一平面上に存在する主権国家間の関係の考察に限定された国際政治学からのパラダイム転換といってもよいであろう。

国際関係という現実的な場で、文化を単位として文化間の関係を解明しようとする際の難点は、誰もがいうように、文化はとらえどころがない、ということである。文化を単位とする以上、文化に境界を持たせなければならない。文化に現実にはない単位性を与えるためには、文化に現実にはない境界を想定しなければならない。振り返れば、シュウォルツには「文化の境界」という問題はなかった。西洋の思想と中国の思想の関係の考察であったから、文化をアメーバ状に想定しながらも、二つの思想それぞれの領域は明解に区別されていた。もっぱら厳復の個人的文化の中における両者間の葛藤を考察することに意味があった。私にとっては、「文化の境界」は未解決の問題である。さしあたりは、シュウォル

ツによって「二つの世界を見るのに有利な展望台」とされる文化の「出会い」、すなわち文化触変そのものを、国際関係の重要な現象として観察し、考察する作業を続けていくことに意味を見出している。

【受け手側に立つ文化触変論】

拙著『国際文化論』に中間報告として提示した文化触変論の一つの特徴は、焦点を明確に日本や中国、あるいはアジアの側に置いたことである。理論的に、そして現実の多くの場合でも、二つの文化が接触して両方が変化するが、その中で受け手の側に立った文化触変論を構想しようとしている。そのため、一つには、意識して「主体的選択」に重点を置いている。戦争、占領、植民地の状況や、圧倒的に一方的な「強弱」関係にある状況下でも、受け手の側は「主体的選択」を行うとの前提を置いて、研究すべきであると考え。次には、取りあえず外来と位置づけられる与え手側からの文化に受け手がどのように抵抗するか、「抵抗」を重視しようとしている。

そして、第3には、「敵対的文化触変」という考え方を取り入れている。敵に対抗するために、敢えて敵の文化を取り入れる文化の受容・変容を「敵対的文化触変」と分類し、特に近代アジアの文化触変においてその類型を重視しようとする。なぜなら、厳復の試みは「全面的欧化」ではなく、「敵対的文化触変」であったし、日本、中国、すべての非西洋社会による、いわゆる近代化も「敵対的文化触変」であったとみなすことができるからである。以上、主体的選択と抵抗と敵対的文化触変の三つが『国際文化論』のキーワードであるが、詳細は拙著に譲りたい。

三 史華慈与中国国際学術研討会

【日本における厳復研究】

2006年12月、上海の華東師範大学で「シュウォルツと中国」国際学術研討会が開催された。シュウォルツ教授が存命であれば90歳になるのを記念しての集まりで、日本とアメリカからも参加があった。私も呼ばれて、“Professor Schwartz’s Influence on the Japanese Studies of Yan Fu”（「史華慈老師対日本厳復研究的影響」）と題する粗末な報告をしてきた。自身は厳復研究をしていない身であるが、シュウォルツの厳復研究が日本における厳復研究にどのような影響を与えたかを表面的に概観する短い報告である。内容の要約として、中国語による「摘要」の日本語訳を以下に掲げる。

シュウォルツ先生の名著 *In Search of Wealth and Power: Yen Fu and the West* が出版されたのは1964年、私が同書の日本語訳『中国の近代化と知識人—厳復と西洋—』を東京大学出版会から刊行したのが1978年である。14年間の間隔が空いたことには特に理由はない。この報告で、私は、シュウォルツ先生の厳復研究が日本における厳復の研究にどのような影響を及ぼしたかをお知らせしたいと思う。そのために、日本の厳復研究の歴史を3つの時期に分ける。すなわち、(1) 1964年以前、(2) 1964年から1978年まで、(3) 1978年以降、である。

付録の文献リスト「日本における厳復研究」(“Selected Japanese Works on Yan Fu”)に見られるように、第1期(シュウォルツ以前)にも、日本に相当数の厳復研究が存在したことは当然である。

清末の中国に西洋から進化論を招来した人物として、清末政治思想史の中に嚴復を位置づけるのが通例であった（小野川秀美『清末政治思想研究』が代表例）。康有為、梁啓超などとの関連で嚴復を論じているが、嚴復を単独で、きわめて重要な意義を持つ思想家として論じることを思いついた研究者はいなかった、といえよう。

第2期（1964～78年）はシュウォルツの衝撃を受けた時期である。日本の近代中国思想研究者の何人かが Schwartz, *In Search of Wealth and Power* を原文で読み、その内容を自らの嚴復研究に活かそうとした（代表は高田淳「シュウォーツの嚴復論」、1966年）。しかし、この時代、中国は文化大革命とその後の混乱の時期であり、日本の知識人の中国への関心も定まらなかったために、シュウォルツ先生の嚴復研究の big bang のインパクトが直ちに広がるには至らなかった。

第3期（1978年以降）、シュウォルツ先生の嚴復研究の意義が広く、日本で理解されるようになる上で、拙訳は一定の役割を果たしたと思われる。時あたかも、中国は現代化を開始し、嚴復の名誉回復もなされた。嚴復が嚴復自身として近代中国に大きな足跡を残した人物として理解されるようになった。近代中国の大きな困難、矛盾を最も深いところで体現した重要な思想家として嚴復を捉える見方も広まった。拙訳は4版を重ね、総発行部数は3,400冊である。

シュウォルツ先生の嚴復研究は、アジアによる近代西洋文化の受容と抵抗に関する最良の研究として、近代中国思想史研究にとどまらず、広い分野の研究者から評価されるようになった。特に近代日本政治思想の研究に強い影響を及ぼし、嚴復と近代日本の政治思想家を比較する研究も現れた。政治思想史研究、文化触変研究、翻訳論など、方法論の面でもシュウォルツ先生の影響を強く受けている。

しかし、非西洋としての近代中国と近代日本が、近代西洋に向き合って、どこまで同じ運命に遭遇し、どこから進路を分けることになったのか、という問題についての本格的な思想史的研究は、今、ようやく現れ始めたところである。

私の報告の価値は付録の文献目録にある。日本における嚴復研究の業績をリストアップし、それをシュウォルツの原書が出版された年と、僭越ながら拙訳が刊行された年を分岐点にして、3期に分けてみた。その結果は、第1期（1954-1964年、シュウォルツ以前）が6点、第2期（1965-1978年、シュウォルツ嚴復論出版後、拙訳刊行以前）が18点、第3期（1978-2006年、拙訳刊行以後）が69点である。正確な検討ではまったくないが、全体の傾向としては、日本の中国研究の中でも嚴復への関心が広まり、深まっていることが窺われる。内容的には、タイトルから判断する程度であるが、精密な研究が行われるようになってきている。中国研究だけでなく、日本政治思想史研究の中でも嚴復を取り上げる研究者が出てきており、日中の翻訳の比較検討が行われるようになってきているのも注目される。近代日本政治思想研究の大家であり、篤実な研究者である山下重一教授が、ミル『自由論』などの嚴復訳と日本語訳との比較検討を続けている。

もう一つ、文化的抵抗への関心が出てきているのではないと思われる。そうした関心によって、嚴復研究、あるいは近代中国、近代アジアの文化触変研究の今後の方向性を示すと思われる代表が、藤田雄二『文明の対抗—攘夷論と守旧論に関する日本、朝鮮、中国の比較研究』（御茶の水書房、2001年）である。この書は嚴復を直接扱ったものではないが、日本におけるシュウォルツ嚴復論の影響の到達点

ということが出来る。それはこういうことである。私は、ある年、シュウォルツの厳復論の内容を学生たちに知らせてみたいと考え、東京大学教養学部1年生向けの国際関係論入門講義で、ほとんどすべての授業時間をシュウォルツによる厳復分析の紹介と解説に費やしたことがある。その実験的な講義を聴いた学生の一人がそれに強い感銘を受けた。彼は、思想まで、価値まで変えなければならないという主張に行き着いてしまった厳復の「悲劇」に動かされ、それでは、近代西洋に最後まで抵抗一当時でも無駄とされた抵抗を一しようとした人々の論理は何であったか、そして中国だけでなく、朝鮮や日本ではどうであったか、という問題を立てた。大学院に進学、粉骨砕身して、丹念かつ明晰な論証によって自らの設問を解き、博士論文を仕上げ、出版したのがこの『文明の対抗』という書である。類まれな研究者になると囑望された優秀な頭脳の持ち主であったが、難病のため夭折、同書は遺著となった。軽はずみに厳復の話を鋭敏な18歳か19歳の人に聞かせたために、このような「悲劇」に至ったかと、今でも深い自責の念を拭うことができない。

が、この書には、近代アジアにおける文化交渉の研究の次の課題と方法が示されているように思う。すなわち、適当な比喩ではないが、二つ、三つ、四つと固まっていたビリヤードボールに一つのビリヤードボールが衝突するところは同じであったが、その衝撃を同じ運命として受けたビリヤードボールが異なる方向に動いたのは何故か、それらはどのような動きであったかを、文化触変の観点から解明するという課題である。「(ビリヤードボール・モデル)とは、実は、古典的な国際政治学で用いられることがある単純なモデルである。今、文化触変研究でここに用いた比喩をかりに使うとすれば、そこでビリヤードボールは、いずれも反発係数1の均質なボールなどではなく、まさにまったく反対の形質—シュウォルツのいう「未知数」一であるだろう。」

おわりに

【現代における国際文化交渉研究】

シュウォルツの厳復論を翻訳紹介してから30年、現代における国際文化交渉の現実と研究について、何が見えるであろうか。まず、現代の国際文化交渉が30年前には予想もできなかったような大量化、多様化、高速化の様相を示している。このことをわれわれは無視するわけにはいかない。いわゆるグローバル化、情報化が圧倒的な勢いでわれわれを取り巻いているということは、世界中の文化変化、社会変動の同時性がますます強くなっているということにほかならないであろう。そのことから、1世紀以上前の厳復が取り巻かれていた文化関係にも、あるタイムラグを持ちながらも同時性があったということの意味を振り返ってみてもよいのではないだろうか。しかし、同時に、今日では、受け手の側の文化変化に許される時間がほとんどゼロであることをどう考えればよいか、考えなければならないであろう。

2番目に、今日の国際関係には、主体の多様化どころか、多層化がある。それから、もはやエリートだけの国際関係ではないという意味での、主体の大衆化が大きな特徴である。つきつめれば、国際関係においても個人が主体として析出しているのが現代である。とすれば、40～50年前のシュウォルツの厳復研究は、今や、重層構造の中核としての個人文化の研究という側面を肯定的に、強く見せるのではないか。社会集団の文化のレプリカとしての個人文化の研究をすることに新たな意義があるのではないか

と思う。

3番目として、すでに繰り返し述べたように、今後、ますます文化を単位として研究をしていくことになる。しかし、基本的な考え方においても、方法についても未解決の問題が多く、現在の私が解決への方向性として指摘することができるのは、文化が重層的に累積しているということだけである。そのような文化を一つ一つどう捉えるか、どのようにして単位化するか、そして、その間の関係をどう考えるかということが課題として浮き上がってくる。

最後に、課題が山積しているにもかかわらず、文化交渉論の意義が大きく浮かび上がってきていると私は思う。文化交渉といえば、まずは文化と文化の間の交渉であるが、その文化は、互いに重層的に存在するものであり、究極的には個人の中に存在しているものであるとすれば、文化交渉は、究極のところ、文化の内面における交渉、すなわち個人の内面における交渉と考えることができる。上の1では、厳復の中に近代との格闘と伝統との格闘が同時並行的に厳しく行われたことに注目したいと繰り返し述べたが、そのことが今日の文化交渉論、文化交渉研究にとって、シュウォルツ厳復論の最大の遺産なのではないかと考える。

参考文献（参照順）

- 河田悌一「近刊紹介—B・I・シュウォルツ著・平野健一郎訳『中国の近代化と知識人—厳復と西洋—』『アジアクォーターリー』第10巻第4号、1978年12月、128-130ページ
ちなみに、シュウォルツ厳復論拙訳の紹介・書評としては、他に
山田辰雄「書評 B.I.シュウォルツ著、平野健一郎訳『中国の近代化と知識人—厳復と西洋—』『共産主義と国際政治』第9号、1978年9月」と
砂山幸雄「シュウォルツ『中国の近代化と知識人』」、長崎暢子・山内昌之編『現代アジア論の名著』中公新書、1992年がある。
- Benjamin Schwartz, *In Search of Wealth and Power: Yen Fu and the West*, Cambridge, Harvard University Press, 1964
Sadako Ogata, *Defiance in Manchuria: the Making of Japanese Foreign Policy, 1931-1932*, Berkeley, University of California Press, 1964
緒方貞子『満州事変と政策の形成過程』原書房、1966年
Kenichiro Hirano, "The Japanese in Manchuria, 1906-1931: A Study on the Historical Background of Manchukuo," Ph.D. thesis, Harvard University, 1983
Benjamin Schwartz, *Chinese Communism and the Rise of Mao*, Cambridge, Harvard University Press, 1951
アンドリュー・ゴードン、篠原一郎訳『日本人が知らない松坂メジャー革命』朝日新書、2007年
平野健一郎「国際学からの予想—マツザカは今年、さらに活躍する—鹿島正裕編『国際学への扉—異文化との共生に向けて』によせて」、風行社「風のたより」第34号、2008年、1-3ページ
王弼『厳復伝』上海人民出版社、1957年
平野健一郎『国際文化論』東京大学出版会、2000年
平野健一郎「文化的関係としての国際関係」、武者小路公秀・嶺山道雄編『国際学—理論と展望』東京大学出版会、1976年、173-200ページ
Hirano Kenichiro, "Professor Schwartz's Influence on the Japanese Studies of Yan Fu—史華慈老師對日本嚴復研究的影響—", with "Appendix: Selected Works on Yan Fu in Japan" (次項の学会論文集、167-186ページに収録、Waseda University COE-CAS *Working Paper*, No.45 としても印刷。次々項の学会報告書、111-123ページには中国語訳掲載)

華東師範大学『史華慈与中国国際学術研究会論文集』2006年12月

許紀霖・朱政恵編『史華慈与中国』吉林出版集团有限责任公司、2008年

朱政恵編著『史華慈学譜1916-1999』上海辞書出版社、2006年

藤田雄二『文明の対抗—攘夷論と守旧論に関する日本、朝鮮、中国の比較研究』御茶の水書房、2001年